氏名（本籍）	劉　治国
学位の種類	博士（芸術学）
学位記番号	博甲第　　7414　　号
学位授与年月	平成　27　年　3　月　25　日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	古代鋳造技法によるブロンズ彫刻表現の研究

主　　査	筑波大学教授	博士（芸術学）	岡﨑 昭夫
副　　査	筑波大学教授	博士（芸術学）	中村 義孝
副　　査	筑波大学教授		柴田 良貴
副　　査	東京福祉大学講師	博士（芸術学）	宮坂 慎司

論文の内容の要旨

（目的）

本研究は、古代鋳造技法（土鋳型鋳造法）を用いたブロンズ彫刻作品の制作を彫刻造形から鋳造過程まで、一作家が一貫した過程の中で行うことによって生まれる表現としての効果を追求し、その成果を示すことを目的とする。

（対象と方法）

本研究の対象は、古代鋳造技法（土鋳型鋳造法）と古代日本においてこの古代鋳造技法によって生み出されたと考えられる銅鐸の造形性である。これらの歴史的背景と造形の具体的特性についての調査及び考察の後、それを踏まえた著者自身の制作研究によって、古代鋳造技法の現代芸術表現としての可能性について追求、及び成果を提示するものである。

（結果）

本研究は、最終的に以下の様な知見を提起している。

Ⅰ古代鋳造技法の持つ現代表現としての可能性を提示するに至った。具体的には以下の２点が挙げられている。①「土鋳型」の土粒子の粗度を一作品の中で変化させることで生まれる豊かな質感の造形。（偶発的な表情と人為的表現の結合）②古代鋳造技法による制作上、機能的観点から必要とされる「型持ち」を造形的に捉え直すことで生まれる、作品の内部空間と外部空間を繋げた造形。

Ⅱ実験制作を行う中で以下の様な実証結果を副次的に得るに至った。古代鋳造技法において鋳型材として使用する土は、特殊な「真土」に限らず、焼成を行わない天然の土と砂によっても代用できる。これは実験考古学の分野において通説とされてきた、土製鋳型による古代鋳造法とは即ち「真土」を用い

たものである、という説に対して疑問を投げかけるものである。

（考察）

上記の結果を導くため、本研究では以下の様な章立てにより考察を展開している。第 1 章ではブロンズ彫刻作品の制作において彫刻と鋳造という二つに分けられる制作段階に着目しており、それぞれの段階における役割とまた両者の相互的影響関係についての考察を展開、明確化している。第 2 章においては、古代鋳造技法について歴史的背景と造形の具体的特性について示している。また古代鋳造技法において鋳型材として使用する土が特殊な「真土」に限らず、焼成を行わない天然の土と砂によっても代用できるという指摘と、実証実験もこの章で示されている。第 3 章では、第 2 章で提示した古代鋳造技法に基づき、制作実験により、「表面の質感」や「型持ち」についての芸術表現としての効果を探究し、可能性を提起している。第 4 章では、第 3 章で提起された効果の作品への展開が、四つの作品についてそれぞれ制作過程に沿って論じられている。そして結章において上記の（結果）に示される結論と今後の課題が示されている。今後の課題は主に以下のような内容であった。作品の質感に影響を与える要素の更なる検討が必要であるとして、様々な種類の土による制作実験や、型を焼成する際の温度と時間の相関についての考察、「鋳型面」に直接「彫る」ことで得られる効果などを挙げている。

審査の結果の要旨

（批評）

日本に於ける古代鋳造技法は、弥生時代に朝鮮半島から伝わったものであるが、銅剣等の鋳造では鋳型材に石が用いられたり、惣型法や込め型法や蝋型法の鋳型材には一般的に焼成した土（真土）を使用していたとされていた。本研究において、古代鋳造法の鋳型材に焼成されていない土や砂が使用された可能性を提言し実験を通して論証した点は、鋳造史的観点から見ても意義がある。またその土鋳型鋳造法を用いて現代におけるブロンズ表現の可能性を探る本研究は、彫刻の分野の研究ではかつて見られないもので独創的であるといえる。土鋳型鋳造法を用いた彫刻表現の可能性を探っていく方法として、彫刻制作と鋳造過程の一貫した流れの中で行う立場をとっており、近代以降、彫刻家が鋳造過程まで行わなかった制作方法とは異なり、鋳造過程の中で制作を積重ねながら新しい知見を得ている点で評価したい。彫刻表現効果の探究として特に成果が見られるのは鋳肌の質感である。粗い砂を鋳型内面に使用し、ブロンズ表面に砂を噛ませた表現等は、素朴な土鋳型鋳造法の特質が効果的に表れたものと評価できる。また、銅鐸の造形における具体的特性や、鋳造の技法などについても良く調査・考察し、型持ちの機能を有した空間や、耐火性が低い未焼成土を使用したために生まれる鋳バリを造形の要素として取り入れ、実験制作を行っている。表現がいまだ未消化な部分もあるが、今後の展開に大いに期待を持つことができる。また鋳型を制作する過程で彫刻の形態を構成していく方法や、鋳型内面に直接彫りこむレリーフ的表現においても新たな可能性を示唆しており、本研究の成果は今後のブロンズ彫刻表現を探求していく指標としての役割を果たすものとして高く評価することができる。

平成 27 年 1 月 5 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。